

# 学級文化の変容における小集団の関係形成的意味

— 自主学習におけるアクロスティックの製作及び発表活動の分析 —

○ 本山 方子 無藤 隆

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科) (お茶の水女子大学生生活科学部)

## 1. 問題

学級文化の生成と、子どもの個別の活動や個性の出現との関連という問題に対し、自主学習では両者は連動していることが示された(本山・無藤、1995;1996)。ただし、これまでの子ども個人による詩の暗唱活動以外に、小集団による別の活動が学級文化とどのように関わるかを明らかにする必要がある。個人間の関係性の他に、小学校中学年以降でみられる親密で閉鎖的な小集団の関係性形成を除外して学級文化は成立しないからである。本研究では、アクロスティック(「かきつばた」の折り句のように、行頭の文字をつなげると語句になる詩でことば遊びの一種)の製作や発表が2~3名の小集団で行われることに着目し、その活動でルーティンが変容したり新たなアイデアが出続ける意味を小集団の関係性形成の点から明らかにする。

## 2. 方法

**分析対象**：都内の小学校のある学級(男子19名、女子20名、計39名)で、3~4年生にかけての2年間、週2~3時間行われた学担による自主学習の授業。

**調査方法**：原則的に週1回のフィールドワークによる。調査は3年時41回、4年時22回、行った。

**授業形態**：授業の前半では発表の準備、読書、本作りなどの個別作業を子どもが行う。後半では詩の暗唱や自由作文、アクロスティックなどの発表を行う。発表数は3年時534件、4年時320件である。

**アクロスティックの活動**：教科担任の授業を契機に3年時11月に導入された。小集団による作品の製作、一行毎の朗読交替による発表、聞き手による行頭のことばの解答、という手続きを経る。各回の発表平均比は3年時24.0%、4年時16.2%であった。

## 3. 結果と考察

**作品の変容**：行頭のことばは導入時の単語のみから文章化されていった。また「いま3組の先生は」という質問が行頭のことばで、発表の聞き手は質問の答を解答する(「〇〇先生」)形態が3年時12月に出現し3学期以降主流になった。行頭のことばの題材は主に年中行事、学級や家庭の生活であったが、4年時にはさらに「発表はいくつ」など現在の進行状況や自分の作文など新奇のアイデアが導入され

た。作品内容は、行頭の文字に誘導され超現実的で空想的であったが、4年時にはことばを補足し展開の必然性を強調し詩的世界を具象化する作品が出てきた。行頭のことばの質問化と内容の説明化は作品自体を冗長にした。変容しないのは行頭のことばと内容の不一致や、行頭の「ん」の処理である。マンネリ化は、特定の文字が行頭にある場合、作品を超えて類似する語句の後続にみられた。例えば「は」は「歯」に関連する語句が多く選択された。**発表におけるルーティンの変容**：行頭のことばが質問形であると発表者は「上の答えが問題になります」と宣言するようになった。導入時は行頭のことばの解答権は指名で得られたが、翌学期以降は挙手が多ければ誰かの「いっせーのせ」を合図に一斉解答するようになり、4年時には少人数の挙手であっても適用された。3年時には行頭のことばは聴き取りが規則とされたが、4年時になるとその長文化に伴い書き取りが可とされた。変容しないのは、行頭を明確にした朗読が求められたことや、発表時に作品内容の質が問われなかったことである。**製作過程における相互作用**：製作過程では、語彙選択において互いの発想のふつかりと受容がみられた。加えて、選択の理由づけが語られることで、超現実的で空想的な詩的世界が小集団内で共有された。例えば、「さ」の後続語句の選択に際し、前行の「うしがモーモーと笑っていた」という理由づけによって「さむけがする」が採用された。この相互作用が繰り返されることで、製作者間で「変な内容を共有しうる仲」という、隠語の共有に似た、親密な関係性を感じとることができるのであろう。子どもは、空想世界の共有と独創的なアイデアの協同創出によって小集団内の閉鎖的な関係性を形成した。同時に、集団独自のアイデアが学級から承認を得ることで親密な関係性の表出と強化を成し遂げた。この活動は手続きの定型化、創作のし易さ、協同作業による責任の軽減、発表時の出題—解答行為の楽しさなどの点で協同作業の試金石として利用し易いのだろう。小集団の関係性形成として学級文化が利用され、同時に学級文化は小集団の関係性形成の過程として生成される。